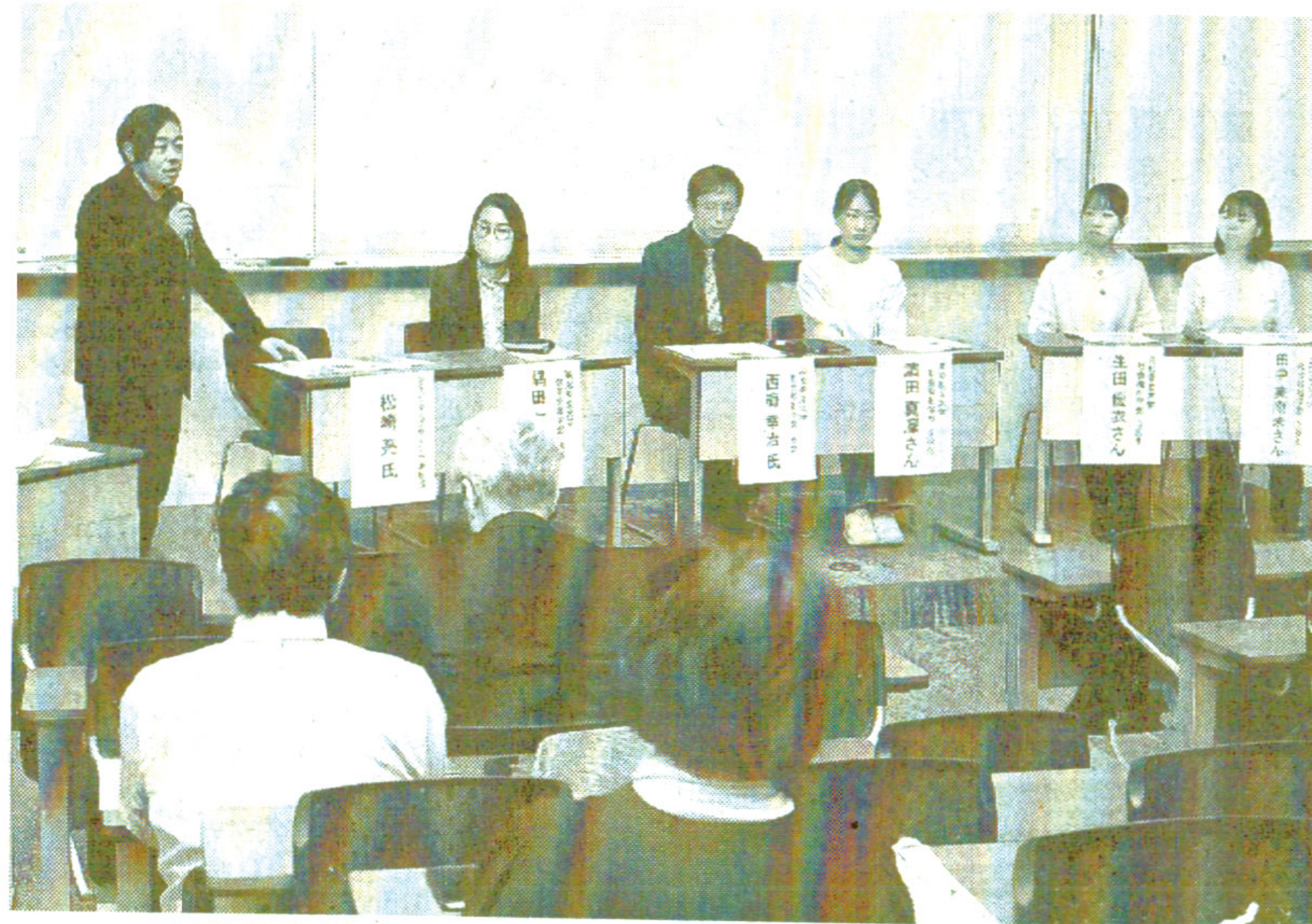


高知市の県大

交流する「場」の力 重要 共生社会考えるシンポ

地域共生社会のつくり方を考えるシンポジウムが7日、高知市池の高知県立大



地域共生社会のつくり方を考えたシンポジウム
(高知市池の高知県立大学)

学で開かれ、宮崎県で先進的実践を行う社会福祉協議会の職員が、住民主体のまちづくりの秘訣を紹介した。

同大学は2024年度から「リ・デザインプロジェクト」として、学生や教員が地域に入り、課題解決やつながりの再構築を支援している。この日は、大学や医療福祉の関係者ら約60人が聴講した。

シンポでは同県三股町社協の職員、松崎亮さん(45)が登壇。同社協は「社会の無縁化が進む中、新たな場(縁)のつくり直しが必要」として、20年に専門チーム「コミュニティデザインラボ」を設置し、松崎さんが同ラボ所長を務めている。取り組み事例として、不登校の子どもの居場所づくりを紹介した。

以前から、居場所は構えていたが「子どもが来な

った。支援の切り口でなく、本人たちが『気になること』を入り口にしない」と発想を転換。かくれんぼ大会やダンス、ギターの教室など、さまざまなメニューを用意し、誰でも参加できる夜間開催の「よる学校」としたことで「不登校の子も足を運ぶようにな

った」と語った。さらに学校利用者が中心となつて、フリースクールが開設される流れができたと振り返り、「場をつくり多様な人が交流すれば、プレイヤー(主体的に動く人)が生まれ、困りごとが解決できる」と、場の力を強調した。

(石丸静香)